

令和 2 年 6 月 13 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02160

研究課題名(和文) 朱熹の思想体系における周敦頤の位置の再検討 - 『朱子語類』巻94の精読に基づいて -

研究課題名(英文) Reappraising the position of Zhou Dunyi (Shu Ton-i) in Zhu Xi's (Shu Ki) system of thoughts - on the basis of perusal of Zhuziyulei (Shushigorui) Vol.XCIV

研究代表者

恩田 裕正 (ONDA, HIROMASA)

東海大学・清水教養教育センター・教授

研究者番号：70307297

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：朱子学の基本文献である『朱子語類』において、思想的先人として重視された周敦頤の著作を論じた巻94「周子之書」篇訳注の精確な読み直しを通して、朱熹の思想体系における周敦頤『太極図説』『通書』の占める位置の再検討を行った。研究成果は、主に『朱子語類』巻94の訳注としてまとめており、読解に必要な重要概念や口語語彙の詳細な注及びそれに基づいた現代日本語による訳文の形で公開されることとなるため、他領域の専門家や一般読書人にも利用しやすいものとなっている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『朱子語類』巻94「周子之書」篇を精読することによって、周敦頤と朱熹の思想が融合した旧来の周敦頤像から脱して『太極図(説)』『通書』に対する朱熹自身の解釈を析出し、それを明確に把握する基盤を形成することができた。

また、研究成果は、準備中のものも含めて、重要でありながら精確な読解が困難な文献を詳細な注と平易な日本語で翻訳して公表することを中心にしており、他領域の研究者のみならず一般の人々が普通に読むことのできる文献として提供するものである。

研究成果の概要(英文)：Zhou Dunyi (Shu Ton-i) was esteemed as one of the pioneers of Neo-Confucian Thought (School of Zhu Xi [Shushigaku]). His important work includes "The Theory Based on the Figure of Taiji (Taiji-tu shuo, Taikyokuzusetsu)" and "Tongshu (Tsusho)." To understand Zhu Xi's (Shu Ki) interpretations of "The Theory Based on the Figure of Taiji" and "Tongshu," we need to peruse "Zhuziyulei" Vol.CXIV. On the basis of this perusal, we reappraised the position of Zhou Dunyi in Zhu Xi's system of thoughts. To clearly show the results of our study, we inserted detailed endnotes in "Zhuziyulei" Vol.CXIV and translated it into easily accessible Japanese. As a result, our work now provides the general public with easy access to "Zhuziyulei."

研究分野：中国哲学

キーワード：中国哲学 周敦頤 朱熹 朱子語類 太極図説 通書

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の代表者・分担者4名は、平成24年度～平成26年度科学研究費助成事業・基盤研究(C)「心・身体・環境をめぐる「仁」概念の再検討 - 『朱子語類』巻4～6を中心に」において、朱子学の「仁」概念について再検討を行ってきた。この「仁」は、人の本「性」の端的な内実を指し示す中心概念であり、主に人(の心)に関わる領域で問題とされてきたものである。しかし、その「性」は、宇宙のありとあらゆるもの/こと存在の根拠であり、またそのあるべきあり方を具体的に規定する「理」そのものとされていることから、朱子学においては、「仁」も人の心にとどまらず、身体ひいては自然・環境、さらにそれら相互の関係のあるべきあり方を規定する概念へと拡充されている。上述の研究課題においては、「性」(その端的な内実「仁」) = 「理」は「人」 - 「宇宙(自然・環境)」のそれぞれやその相互の関わりを規定するものであるが、その「相互の関わり」に関する部分を、主に「人」側にベースを置きつつ、『朱子語類』巻4～6を題材に検討してきたわけである。

本研究では、上述の研究課題を引き継ぎつつ、朱子学における「人」 - 「宇宙(自然・環境)」の「相互の関わり」を、今度は「宇宙」の側に立脚点を置いて検討することを目指す。朱熹がその「宇宙」の成り立ちやあり方を考えた際に依拠した文献は、経書である『易』であり、このとき「理」は「太極」として把握される。そして、この『易』に基づいた「太極」概念を自己の思想の内に取り込む際に、朱熹が依拠した文献が周敦頤の『太極図(説)』と『通書』であった。こうして、朱熹は、周敦頤を自己の思想の系譜(「道学」)の最初期の重要な先駆者の一人と位置づけ、その両著を後世「朱子学」と呼ばれることになる自己の思想体系を大成する際の必要不可欠な文献と見なし、それらの『解』を書いている。

こうして周敦頤は、他ならぬ朱熹によって「道学 - 朱子学」史の先頭に位置づけられ、その視線の元はずっと読まれてきた。つまり、朱熹の解釈に基づいたものが、“周敦頤「自身」”の思想として語られてきたわけである。これは、朱子学の継承者についてばかりでなく、その批判者にとっても同様であった。だが、近年、朱熹の解釈から切り離して周敦頤の思想を検討する研究が進展し、いわばその実像が明らかになってきた。たとえば、周敦頤を「道学」の開祖と見なすことは、あくまで朱熹による自己の立場の正統性の主張やその思想上の要請であるにすぎないことが明らかにされている(土田健次郎『道学の形成』)。

しかし、このことは、中国近世思想研究においてまた新たな課題が発生したものと見なすことができる。いくら周敦頤自身の思想が現在明らかになったとしても、それによって、朱熹以降の朱子学継承者・批判者の思想の解明に資すると単純にいえるわけではないからである。なぜなら、朱熹及びその後学、またその批判者たちにとっては、朱熹の解釈による『太極図(説)』『通書』こそが、「真」の周敦頤像を明らかにするものであったのであり、この「像」を通して顕彰・継承・批判し、自己の思想形成を行っていたわけで、“朱熹による「周敦頤」像を明らかにすることなくしては、朱熹以降の朱子学継承者・批判者の思想を検討することはできないからである。一方、周敦頤自身の像と朱熹による像が未分化のまま論じられてきた周敦頤を、前者が近年の研究によって析出されてきたことによって、後者を前者と切り離れたかたちでより明確に把握できる条件が整ってきたことにもなる。ここに、朱子学研究において、朱熹の思想体系における周敦頤『太極図(説)』『通書』の占める位置を再び明らかにする意味が生じてくることになる。

朱熹の思想体系における周敦頤『太極図(説)』『通書』の占める位置を検討するためには、朱熹の注解である『太極図(説)解』『通書解』をふまえる必要がある。しかし、この注解は(『太極図説』『通書』それ自体と同様)ごく簡潔なものであって、その理解には、自身の注解を敷衍解説した朱熹の「ことば」を多く収める『朱子語類』巻94「周子之書」篇の読解をふまえる必要がある。

しかし、『朱子語類』はその文献としての性格上、発言の状況がとらえにくい場合があり、思想的な位置づけに慎重な検討が必要なほか、当時の口語表現を多数含んでいて読解は容易なものではなく、これまでに公表されている読解にもさらなる考察が求められている。

このように、新たに検討すべき課題が生じていた開始当時の研究状況を背景にして、その問題解決のための基盤を構築することを目指し、本研究は計画、実施されたのである。

### 2. 研究の目的

本研究は、先述の科学研究費助成事業による研究課題を引き継ぎつつ、朱子学における「人」 - 「宇宙(自然・環境)」の「相互の関わり」を「宇宙」の側に立脚点を置いて検討することを目指すものであった。朱熹がその「宇宙」の成り立ちやあり方を考えた際に依拠した文献は経書である『易』であるが、それを自己の思想体系に取り込む際に依拠した文献が周敦頤の『太極図(説)』と『通書』であった。実際、朱熹は、周敦頤を自己の思想の系譜(「道学」)の最初期の重要な先駆者の一人と位置づけ、その両著を自己の思想体系の必要不可欠な文献と見なし、それらの『解』を書いている。

したがって、『太極図(説)』『通書』に対する朱熹による解釈を検討する必要があるのだが、伝統的な読解には制約があった。なぜなら、朱熹によって周敦頤が「道学 - 朱子学」史の先頭に位置づけられたため、『太極図(説)』『通書』については朱熹の解釈に基づいた理解が“周敦頤「自身」”の思想として、いわば周敦頤と朱熹の思想が渾然一体化した形でこれまで受容されてきたからである。ただ、近年になって朱熹の解釈から切り離して周敦頤の思想を検討する研究が進展し、周敦頤自身の像と朱熹による像が未分化のまま論じられてきた周敦頤の実像が明らか

になってきた。しかし、周敦頤と朱熹の思想が融合したとらえ方から脱して、『太極図(説)』『通書』に対する朱熹自身の解釈を析出し、それを明確に把握することについてはまだ不十分な点があるように思われる。ここに、朱子学研究において、朱熹の思想体系における周敦頤『太極図(説)』『通書』の占める位置を再び明らかにする意味が生じてくることになる。

本研究では、『太極図説』『通書』を最終的な対象とすることになるが、これらは主に『易』の文言をふまえた箴言集のような体裁で、そのままでは理解することがきわめて難しいものである。また、本研究では朱熹による読解を目的としていることから、それらを直接扱う前に朱熹の注解である『太極図(説)解』『通書解』をふまえる必要がある。しかし、この注解も簡潔なものであって、朱熹の注解も含めた『太極図(説)』『通書』の理解には、その注解を敷衍解説した朱熹の「ことば」を多く収める『朱子語類』巻94「周子之書」篇の読解をふまえる必要がある。

こうした研究状況をふまえ、本研究では、周敦頤『太極図説』『通書』について、朱熹の注解及び『朱子語類』巻94の精読に基づいて詳細な注釈を加え、朱熹の注解を含めて翻訳を行う。また、その準備として、既発表の『朱子語類』巻94の訳注に大幅に修訂を加えて公開する。そして、これら訳注の公表を通して、朱子学の大成者である朱熹の思想体系における周敦頤『太極図(説)』『通書』の占める位置の再検討を行うことを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究では、周敦頤『太極図(説)』『通書』を、朱子学の大成者である朱熹の解釈を精密に読解し、その解釈に徹底的に従って読み直すことを通じて、朱熹の思想体系における『太極図(説)』『通書』の占める位置を再検討することを目的とするものであった。上記の研究対象テキストの読解にあたっては、朱熹の注解である『太極図(説)解』『通書解』の理解が前提となるが、この注解の記述も簡潔なものであって、その理解には、その注解を敷衍解説した朱熹の「ことば」を多く収める『朱子語類』巻94「周子之書」篇の読解をふまえる必要がある。したがって、本研究の目的を達成するためには、『朱子語類』巻94をわかりやすい現代日本語によって正確に読解することがすべての基盤とならざるをえない。

この基盤を確立するための研究方法は、平成24年度～平成26年度科学研究費助成事業・基盤研究(C)「心・身体・環境をめぐる「仁」概念の再検討 - 『朱子語類』巻4～6を中心に」において実行したものと同様である。具体的には、朱熹の解く/説く周敦頤の思想を、漢文を訓読しただけのような漢語に寄りかかった平板で意味のよくわからないものではなく、「生きた」ことばに立脚した立体的で平易なかたちで再提示するために、『太極図(説)』『通書』という周敦頤自身のテキスト、『朱子語類』巻94「周子之書」篇の記述、『朱子語類』の他の巻、『太極図(説)解』『通書解』『四書集注』『朱文公文集』等の朱熹自身によるテキスト、経書及びその注疏、道教文献等における記述とのネットワークを構築して明示することを目指した。このため、本研究においては『太極図説』『通書』(朱熹の『解』を含む)及び『朱子語類』の訳注、しかも諸テキストとの関係を示した詳細な注を附すというかたちがどうしても求められる。そして、この作業は、周敦頤、朱熹(及びその弟子たち)の「ことば」の精密な解釈を行うことと大量の関連文献を博捜し分析することが必要であり、具体的には次の役割分担で研究を遂行した。

本研究における役割分担は次の通りである。対象とするテキストの読解については、原則として全体を分割してそれぞれに割り当てた。その上で、研究代表者の恩田が本研究全体の統括の他、『太極図(説)』『通書』と『朱子語類』との関係及び『朱子語類』というテキストの性格上大量に含まれる口語語彙の分析を、研究分担者の伊東が『太極図(説)』『通書』『朱子語類』と朱熹の主著である『四書集注』との関係の分析を、同じく林が『太極図(説)』『通書』『朱子語類』と朱熹の書簡や雑著等を集めた『朱文公文集』との関係の分析を、同じく松下が『太極図(説)』『通書』『朱子語類』と道教文献との関係の分析をそれぞれ主として担当した。そして、これらの読解と分析を研究代表者・分担者全員で検討・修訂して訳注稿を作成した。

つまり、本研究では、再検討された朱熹の思想体系における周敦頤の位置について、『朱子語類』巻94「周子之書」篇の平易な現代日本語による訳文と注、とりわけ注を基盤として明らかにするという方法を取ったのである。

### 4. 研究成果

本研究は、先述の科学研究費助成事業による研究課題を引き継ぎつつ、朱子学における「人」-「宇宙(自然・環境)」の「相互の関わり」を「宇宙」の側に立脚点を置いて検討することを目指すものであった。朱熹がその「宇宙」の成り立ちやあり方を考えた際の鍵となる概念は、「理」と同一視された『易』の「太極」であったが、この「太極」概念を自己の思想体系に取り込む際に依拠した文献が周敦頤の『太極図(説)』と『通書』であり、朱熹はそれらの『解』を書いている。このため、『太極図(説)』『通書』に対する朱熹による解釈を検討する必要があるのだが、後世における朱子学の圧倒的な影響力のため、『太極図(説)』『通書』については周敦頤と朱熹の思想が融合した形で伝統的に受容されてきたという困難があった。近年の研究によって周敦頤の実像が明らかになってきたとはいえ、『太極図(説)』『通書』に対する朱熹自身の解釈を析出し、それを明確に把握することについてはまだ不十分な点があった。そこで、『太極図(説)』『通書』に対する朱熹の注解の再検討を企図したのであるが、この注解は簡潔な記述であって、その理解には、その注解を敷衍解説した朱熹の「ことば」を多く収める『朱子語類』巻94「周子

之書」篇の読解を前提とする必要があった。

本研究は、『朱子語類』巻94の精確な読み直しにまず取り組んだが、これによって上述の課題に対して一つの基盤を形成したものと見える。すなわち、『朱子語類』巻94の本文を当時の口語表現の正確な理解によって読み直し、その本文の意味を『太極図(説)』『通書』という周敦頤自身のテキスト、『朱子語類』巻94「周子之書」篇の記述、『朱子語類』の他の巻、『太極図(説)解』『通書解』『四書集注』『朱文公文集』等の朱熹自身によるテキスト、経書及びその注疏、道教文献等における記述とのネットワークを構築することで位置づけ、それらをまとめた訳注という形式で示すことで、『太極図(説)』『通書』に対する朱熹による解釈を浮き彫りにしたのである。

この『朱子語類』巻94の訳注の出版自体については、2020年5月末の時点では未公開であるが、本研究で得られた成果は、学会発表と別の論著の形でその一部を公表している。恩田は、『朱子語類』中に含まれる口語語彙の分析や他巻との関係に関して得られた知見を、前回の科学研究費助成事業の成果でもある巻4(全員の共著)及び現在進めている巻8(完結)・9・20~22・101など他の巻の訳注作成に反映させ、その一端を研究会で発表する他、論文として公開している。伊東は、周敦頤に関連する先行研究や朱熹の周敦頤理解にも関連する朱子学の身体論に関して解読や分析を進め、論文・国際学会等で発表を行った。林は、周敦頤の著作についてその朱熹の解釈にもとづいた場合の主要内容を検討する他、『朱子語類』資料の取扱いに年代的差異の観点を取り入れる試みや宋明理学や義理の学の後世における受容のあり方の一端を研究し、得られた知見を論文として公開し学会発表を行った。松下は、『朱子語類』巻94や周敦頤の著作と同時代の道教との関わりについて、特に道教の内丹道における性命説との関係を中心に、全真教の性命論が北宋から始まる理を中心とした新たな思潮の上に立脚していることに関して研究を深め、得られた知見を論文として公開し学会発表を行った。また、本研究期間内に既発表論文をまとめた『宋金元道教内丹思想研究』(汲古書院)を出版し、全真教及びそれに先行する張伯端以下の内丹道と、朱子学や禅宗の同時代的な力動についても一定の知見を得ている。

なお、巻94の訳注については、本研究の代表者・分担者による共著で汲古書院より学術書として刊行されることがすでに決まっているが、これは『朱子語類』訳注刊行会の『朱子語類』全訳計画の一環をなすものである。

また、当初計画で公表を予定していた周敦頤『太極図説』『通書』及びその朱熹による注解の訳注については、今後順次その訳注を論文として発表し、最終的に単行本として刊行することを企図している。

つまり、『朱子語類』巻94の訳注を公開することは、朱熹の解釈に基づいた理解が“周敦頤「自身」”の思想として、いわば周敦頤と朱熹の思想が渾然一体化した形でこれまで受容されてきた『太極図(説)』『通書』に対する朱熹自身の解釈を析出し、それを明確に把握するための基盤を形成することになり、先行研究による朱熹の解釈から切り離された周敦頤自身の思想の解明と相まって、周敦頤と朱熹の思想の連関を再検討することになると共に、それを東アジア思想史なかんずく朱子学の(前史を含めた)歴史に改めて位置づけ直すことにつながるといえる。

また、研究成果は、準備中のものも含めて、重要でありながら精確な読解が困難な文献を詳細な注と平易な日本語で翻訳して公表することを中心にしており、中国近世思想の研究者のみならず、日本思想・西洋哲学などの他領域の研究者はもちろん、専門外の一般読書人にもきわめて利用しやすいものとするところができることになる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計21件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 恩田裕正・伊東貴之・林文孝・松下道信	4. 巻 30
2. 論文標題 『朱子語類』巻四「性理」篇一訳注（二） 25条～36条	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中国哲学研究	6. 最初と最後の頁 150-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 恩田裕正	4. 巻 30
2. 論文標題 『朱子語類』巻八「総論為学之方」篇訳注（七・完） 140条～159条	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中国哲学研究	6. 最初と最後の頁 165-184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松下道信	4. 巻 -
2. 論文標題 金代の道教 「新道教」を越えて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 古松高志他編『金・女真の歴史とユーラシア東方（アジア遊学233号）』（勉誠出版）	6. 最初と最後の頁 159-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 恩田裕正	4. 巻 73
2. 論文標題 朱子語類訳注（二一）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 汲古	6. 最初と最後の頁 27-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 恩田 裕正	4. 巻 132
2. 論文標題 『朱子語類』巻九「論知行」篇訳注(一) 1条~27条	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 斯文	6. 最初と最後の頁 18-36
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊東 貴之	4. 巻 -
2. 論文標題 心的軌跡與身體性 由朱子學、陽明學、清代思想的考察	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 儒学与時代：復旦大学上海儒学院首届年会論文集	6. 最初と最後の頁 124-128
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林 文孝	4. 巻 18
2. 論文標題 中国歴史思想における鏡の比喻	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 立教比較文明学会紀要 境界を越えて 比較文明学の現在	6. 最初と最後の頁 53-73
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) info:doi/10.14992/00015588	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 恩田 裕正	4. 巻 69
2. 論文標題 『朱子語類』訳注(一七)	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 汲古	6. 最初と最後の頁 59-69
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 恩田 裕正	4. 巻 29
2. 論文標題 『朱子語類』巻八「総論為学之方」篇訳注(六) 91条~139条	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 中国哲学研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 恩田 裕正・伊東 貴之・林 文孝・松下 道信	4. 巻 29
2. 論文標題 『朱子語類』巻四「人物之性氣質之性」篇訳注(一) 1条~24条	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 中国哲学研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林 文孝	4. 巻 17
2. 論文標題 「仁と為す」か「仁を為す」か 朱熹『論語集注』のもとでの『論語』顔淵篇「克己復礼為仁」の訓読	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 立教比較文明学会紀要 境界を越えて 比較文明学の現在	6. 最初と最後の頁 31-49
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) info:doi/10.14992/00014584	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松下 道信	4. 巻 50
2. 論文標題 白玉蟾と茶と酒	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 学芸国語国文学	6. 最初と最後の頁 135~148
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.24672/gkokugokokubun.50.0_135	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 12件）

1. 発表者名 伊東貴之
2. 発表標題 The Embodiment of the “Mind” in Neo-Confucianism Beyond the Concept of Cartesian Body - Mind Relationship
3. 学会等名 ISEAP 2019 (First International Conference of ISEAP), International Society of East Asian Philosophy (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松下道信
2. 発表標題 「新道教」を越えて 全真教の新たな位置付けの試み
3. 学会等名 国際日本文化研究センター・共同研究会「比較のなかの東アジアの王権論と秩序構想 王朝・帝国・国家、または、思想・宗教・儀礼」 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊東貴之
2. 発表標題 The Embodiment of the “Mind” in Neo-Confucianism The Schools of Chu His (朱熹) and Wang Yang-ming (王陽明), and Concerning the Problem of Preceding Research
3. 学会等名 第24回・世界哲学大会 (WCP2018) ・中国 (北京), 北京大学・国家會議中心 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 伊東貴之
2. 発表標題 The Embodiment of the “Mind” in Neo-Confucianism (The Schools of Chu His (朱熹) and Wang Yang-ming (王陽明)) Beyond the Concept of Cartesian Body-Mind Relationship and Reconsidering the Philosophical Terminology of Neo-Confucianism
3. 学会等名 Oriental Institute Fairbank Library, Czech Academy of Sciences, Prague (Praha) (国際学会)
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 林文孝
2. 発表標題 『太極図説』における「人」
3. 学会等名 日本学会議公開シンポジウム「科学技術の進展と人間のアイデンティティ - 哲学・倫理・思想・宗教研究からの問いかけ -」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Takayuki Ito
2. 発表標題 Beyond the Concept of Cartesian Body-Mind Relationship: Reconsidering the Philosophical Terminology of Neo-Confucianism
3. 学会等名 ISTP Tokyo Workshop Forum; The 17th biennial conference of the international society for theoretical psychology 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 伊東 貴之
2. 発表標題 心の軌跡與身體性 由朱子學、陽明學、清代思想的考察（心の軌跡と身体性 朱子学、陽明学、清代思想的から考える）
3. 学会等名 儒学与時代：復旦大学上海儒学院首届年会国際學術研討会（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 ITO Takayuki
2. 発表標題 Essays on Mind, Body and Human Nature: Reconsidering the Philosophical Terminology of Neo-Confucianism
3. 学会等名 ICP2016・YOKOHAMA; 31st International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2016年

## 〔図書〕 計5件

1. 著者名 松下道信	4. 発行年 2019年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 560
3. 書名 宋金元道教内丹思想研究	

1. 著者名 伊東 貴之(編)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 国際日本文化研究センター	5. 総ページ数 278
3. 書名 「心身/身心」と「環境」の哲学 東アジアの伝統的概念の再検討とその普遍化の試み (The Philosophy of Mind, Body, and Environment: Reexamination of Traditional East Asian Concepts and Attempt to Universalize Them)	

1. 著者名 伊東 貴之・小島 毅(編)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 359
3. 書名 中世日本の王権と禅・宋学	

1. 著者名 伊東 貴之〔編〕、伊東 貴之・渡邊 義浩・林 文孝〔著〕	4. 発行年 2017年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 252
3. 書名 治乱のヒストリア 華夷・正統・勢	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	伊東 貴之 (ITO TAKAYUKI) (20251499)	国際日本文化研究センター・研究部・教授  (64302)	
研究分担者	林 文孝 (HAYASHI FUMITAKA) (60263745)	立教大学・文学部・教授  (32686)	
研究分担者	松下 道信 (MATSUSHITA MICHINOBU) (90454454)	皇學館大学・文学部・准教授  (34101)	